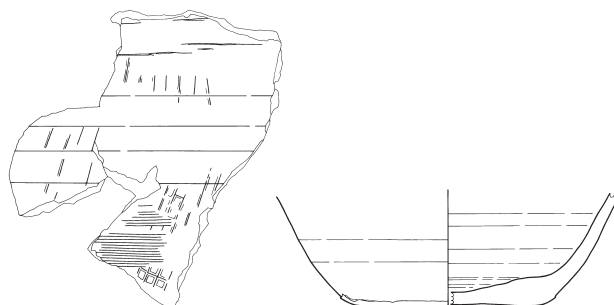


蔵王町文化財調査報告書 第12集

小原遺跡

— 特別養護老人ホーム増床事業に伴う緊急発掘調査 —



2011年（平成23年）9月

宮城県刈田郡蔵王町教育委員会

小原遺跡

— 特別養護老人ホーム増床事業に伴う緊急発掘調査 —

序 文

文化財は、日本列島地域の長い歴史の中で生まれ、今日まで継承されてきた国民共有の財産です。地域色豊かな文化財は、その地域の歴史や文化を理解する上で不可欠なものであると同時に、将来の地域文化の発展の基礎となる大切なものです。

地中に埋もれている埋蔵文化財（遺跡）は、古文書などの文字資料だけでは知ることができなかった地域の実情や、文字がまだなかった時代の人びとの文化や暮らしぶりについて、私たちに多くのことを教えてくれるものです。

蔵王町ではこれまでに堀の内遺跡、中沢 A 遺跡、六角遺跡、西浦 B 遺跡などの発掘調査を行ない、蔵王山麓に暮らした人びとの歴史を窺い知ることができる貴重な発見がありました。一方で、土地との結びつきの強い埋蔵文化財は、様々な開発によって破壊される恐れがあることから、当教育委員会では開発部局等に遺跡の所在を周知徹底するとともに、開発との関わりが生じた場合には宮城県教育委員会と連携して貴重な文化財を積極的に保護することに努めてきております。

本書は特別養護老人ホーム増床事業に伴って一部消滅する小原遺跡の記録保存を目的として平成 23 年度に実施した発掘調査成果をまとめたものです。小原遺跡はこれまで縄文時代の遺跡として登録されていましたが、今回の発掘調査では平安時代の竪穴状遺構とそれに伴う遺物が出土し、縄文時代と平安時代の人びとの生活の痕跡が残された複合遺跡であることが新たに判明しました。今回の調査で小原遺跡のすべてが明らかになったわけではありませんが、本書にまとめられた学術的成果が広く町民の皆さまや各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助となれば幸いです。

今回の発掘調査の実施にあたっては、開発事業主の社会福祉法人桃寿会をはじめとする関係各位よりご理解とご協力をいただきました。篤く御礼申し上げます。

最後になりましたが、先人の残した文化遺産を町民の宝として長く後世に継承していくことは、これからの時代に求められる地域色豊かなまちづくりには欠かせない大切なことでもあります。今後とも、各位のご理解とご協力を念願して序といたします。

平成 23 年 9 月

蔵王町教育委員会
教育長 佐藤 茂 廣

例 言

1. 本書は、蔵王町大字曲竹字小原・田中地内に所在する小原遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の発掘調査は、特別養護老人ホーム増床事業に伴う事前調査として行なったものであり、発掘調査から整理作業および本書の作成に至る一連の業務は、調査原因となった事業の主体者である社会福祉法人桃寿会を委託者、蔵王町を受託者とする業務委託契約を締結し、蔵王町教育委員会が平成 23 年度に実施した。
3. 本遺跡の発掘調査と整理作業は蔵王町教育委員会が主体となり、教育総務課文化財保護係が担当した。職員体制は下記のとおりである。
教 育 長 佐藤 茂廣 教育総務課長 高野 正人 課長補佐 佐藤 浩明
文化財保護係長 佐藤 洋一 主 事 鈴木 雅
文化財専門職臨時職員 我妻 なおみ・庄子 善昭・鈴木和美・渡邊 香織
文化財臨時作業員 我妻 英子・岩佐 若奈・大庭 慶志郎・小杉 佐和子・小林 四郎・小林 美智子・
佐藤 かおる・佐藤 貴美子・佐藤 恵子・佐藤 里栄・松田 律子
4. 本発掘調査の整理作業は下記の調査員が中心となり、室内整理作業員がこれを助けた。
遺構トレース：我妻 なおみ、遺物実測：鈴木 和美・渡邊 香織、遺物写真撮影：庄子 善昭
5. 本書の執筆・編集は調査員全員の協議に基づいて鈴木 雅が担当した。
6. 第 2 図は、5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査における地形分類図「白石」の一部を使用した。
7. 第 3 図は、国土地理院による電子国土 (<http://cyberjapan.jp/>) を利用して宮城県教育庁文化財保護課が提供する宮城県遺跡地図 (<http://www.pref.miyagi.jp/bunkazai/>) の一部を使用した。
8. 本書で使用した土色の記述については、「新版標準土色帖」(小川・竹原 2005) を参照した。
9. 引用文献および執筆にあたり参考にした文献については巻末に一括して掲載した。
10. 本発掘調査で出土した遺物および記録資料は、蔵王町教育委員会が一括して永久保管している。

調査要項

遺 跡 名：小原遺跡（宮城県遺跡登録番号：05126 遺跡記号：A C）

所 在 地：宮城県刈田郡蔵王町大字曲竹字小原・田中地内

発掘調査面積：300㎡

調 査 期 間：平成 23 年（2011 年）5 月 16 日～5 月 21 日

調 査 原 因：特別養護老人ホーム増床事業

調 査 主 体：蔵王町教育委員会 教育長 佐藤 茂廣

調 査 担 当：蔵王町教育委員会教育総務課文化財保護係 主事 鈴木 雅

調 査 員：佐藤 洋一 鈴木 雅（教育総務課文化財保護係）

調 査 協 力：社会福祉法人 桃寿会

目 次

序文

例言・調査要項

第1章 遺跡の概要	1
第1節 遺跡の位置と地理的環境	1
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境	1
第2章 調査に至る経緯	4
第3章 調査の方法と経過	5
第4章 調査の結果	6
第1節 基本層序	6
第2節 発見された遺構と遺物	7
第5章 考察	12
第1節 遺物の特徴と編年的位置づけ	12
第2節 遺構の特徴と性格	12
第6章 まとめ	13

引用・参考文献

報告書抄録

第1章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置と地理的環境

宮城県南部の蔵王連峰東麓に位置する蔵王町（第1図）は、東は村田町と大河原町、西は蔵王連峰をはさんで山形県、南は白石市、北は川崎町と境を接する。町域は東西23km、南北13kmで面積は152.85km²を占め、海拔標高は最高点が西端の屏風岳で1,825m、最低点が東南部の松川と白石川の合流点で20mを測る。町域の西部が主に蔵王連峰に連なる山林原野で、東部の松川流域と円田盆地に田園地帯が形成されている。西部は蔵王^{えんだ}国定公園に含まれ、遠刈田温泉などが蔵王観光の基地となっているほか、東部の丘陵部を中心に果樹園が営まれ、県内有数の果樹生産地となっている。

小原遺跡は蔵王町大字曲竹字小原・田中地内に所在し、蔵王町役場の南約2.3kmに位置する。本遺跡の立地する町東部では、蔵王山系から東流した松川が南へ流路を変えて白石川へ合流するが、流路が大きく屈曲する本遺跡周辺では自然堤防と後背湿地が入り組むやや広い平野を形成している。本遺跡は松川右岸に形成され、開析されて痩せ尾根状となった標高約80mの矢附段^{やづき}丘上に立地している（第2図）。



第1図 蔵王町の位置

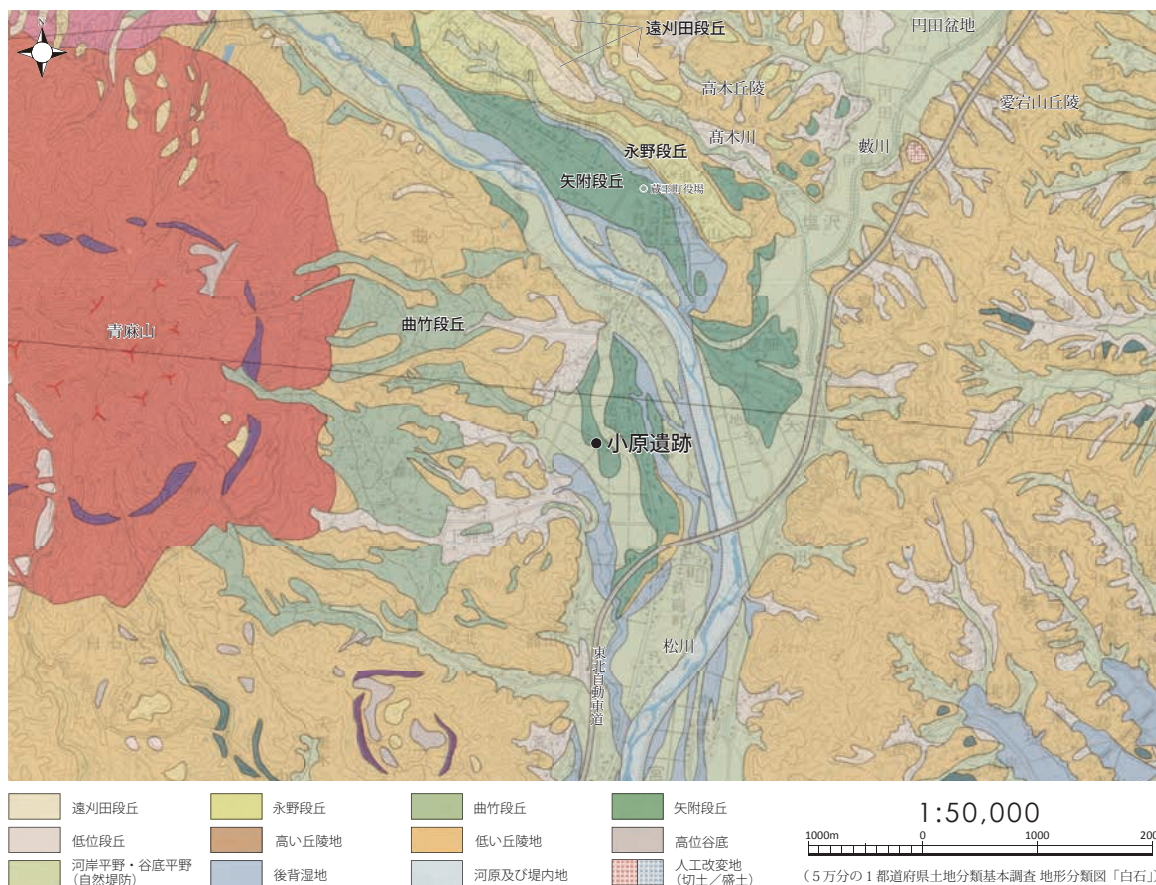
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

蔵王町における周知の遺跡は現在190か所を数える。その多くは町域の東部に分布し、蔵王連峰から派生する丘陵部と青麻山東麓部、松川流域と円田盆地の平野部などに立地する。本遺跡は青麻山東麓部に接して形成された松川右岸の平野に立地しており、町内でも比較的多くの遺跡が分布する地域のひとつである。以下、本遺跡周辺の考古学的様相を概括する（第3図）。

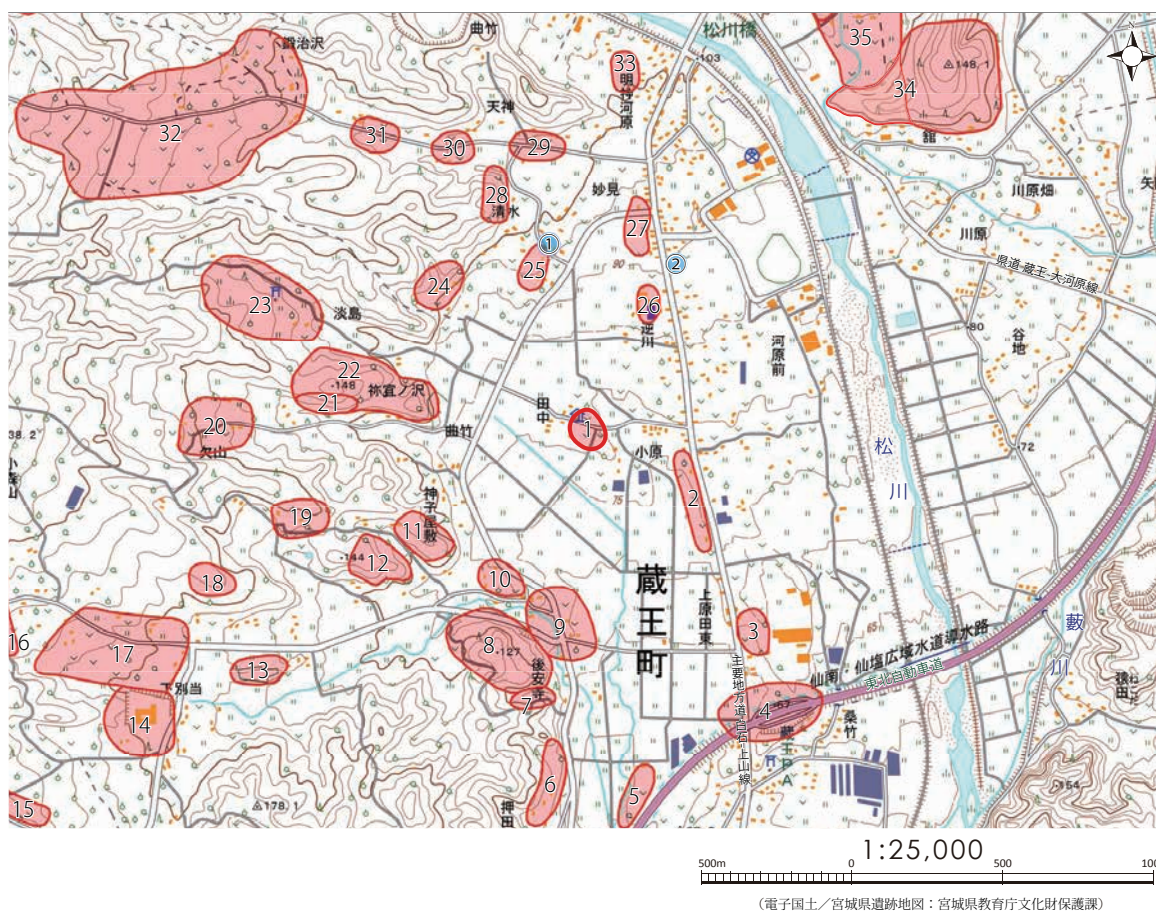
旧石器時代の遺跡は確認されていないが、東北自動車道蔵王パーキングエリア南側の鉄砲町地区では珪質頁岩製の彫刻刀形石器（写真1左）が採集され、後期旧石器時代のものと考えられている。

縄文時代の遺跡は、早期以降の各時期で多くの遺跡が確認されている。上原田遺跡（第3図3）では早期前葉の無文平底土器と局部磨製石鏃が採集されている（林1965）。願行寺遺跡（16）では晩期の屈折土偶が採集されている（写真1右、町指定文化財）。下別当遺跡（17、刈田郡教育会1928・片倉1933）・鍛冶沢遺跡（32、佐藤1904・片倉1932）は縄文時代後期～晩期の遺物が多数採集される場所として早くから知られている。鍛冶沢遺跡では角状の突起を表現した遮光器土偶が採集されているほか、近年の発掘調査で縄文時代晩期の土器埋設遺構群と、これを取り囲むように配置された掘立柱建物跡群が確認されている（宮城県教育委員会2010）。本地域には後期～晩期の大規模集落が集中的に立地するのに対し、北側の松川左岸に形成された永野・矢附段丘面上には中期～後期の大規模集落がやはり集中的に立地しており、占地の傾向に明瞭な変化を見せている。

弥生時代の遺跡には、下原田遺跡（4）、願行寺遺跡（16）、清水遺跡（28）、鍛冶沢遺跡（32）がある。鍛冶沢遺跡では、弥生時代前期の再葬墓が発見されている（宮城県教育委員会2010）。



第2図 遺跡周辺の地形区分



第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡

古墳時代の遺跡には、上原田遺跡（3）、願行寺遺跡（16）、白九頭龍古墳（33、町指定文化財）があるが、いずれも発掘調査は行なわれていない。

古代の遺跡には、上原田遺跡（3）、下原田遺跡（4）、青竹遺跡（9）、後安寺遺跡（10）などがある。下原田遺跡・青竹遺跡では平安時代の竪穴住居跡が発見されている。青竹遺跡では3軒の竪穴住居跡が発見され、大形逆刺付鉄族など多くの鉄製品が出土している。

中世の遺跡には、館の山城跡（8）、青竹遺跡（9）、願行寺遺跡（16）、曲竹小屋館跡（22）、矢附館跡（34）がある。青竹遺跡では掘立柱建物跡・柱列跡・溝跡などの遺構群が確認され、隣接する館の山城跡と一体をなした施設と考えられている（蔵王町教育委員会 2009）。願行寺遺跡は中世～近世の寺院跡と推定されている。安永風土記に「役小角叔父山之坊願行寺跡」とあり、「宮本坊蓮蔵寺書出」によれば奥州藤原氏の保護を受けて最盛期には四十八坊を持つ勢いであったという。また、前述の白九頭龍古墳には、文治の役（1189）で源頼朝軍に討ち取られた藤原国衡の遺骸を埋葬して弔ったとの伝説が残り、墳頂部には白九頭龍大明神の祠が建てられている。

近世には奥州街道が宮地区を通り、さらに宮宿から分かれて松川沿いに永野宿へ至り、猿鼻宿、四方峠、笹谷峠を經由して山形へ至る笹谷街道（羽前街道）が通っていた。曲竹地区には曲竹一里塚（②・写真2、町指定文化財）が現存する。我妻家住宅（①・写真3、国指定重要文化財）は刈田郡有数の豪農として度々肝入を務めた我妻家の居宅で、江戸中期に建てられた大規模な茅葺き民家である。



写真1 鉄砲町出土彫刻刀形石器(左)・願行寺遺跡出土土偶(右)

第1表 周辺の遺跡（番号は第3図に対応）

番号	遺跡名	種別	時代
1	小原遺跡	散布地	縄文晩・平安
2	逆川遺跡	散布地	縄文早・前
3	上原田遺跡	散布地	縄文早～中・古墳・古代
4	下原田遺跡	集落	縄文前～晩・弥生・平安
5	中野B遺跡	散布地	古代
6	根方B遺跡	散布地	古代
7	根方A遺跡	散布地	縄文後
8	館の山城跡	城館	中世
9	青竹遺跡	散布地	縄文後・古代・中世
10	後安寺遺跡	散布地	古代
11	若神子山遺跡	散布地	縄文後
12	若神子山B遺跡	散布地	縄文
13	下別当下遺跡	散布地	縄文後
14	小屋場遺跡	散布地	縄文後・晩
15	沢入遺跡	散布地	縄文早・中・後・古代
16	願行寺遺跡	散布地・寺院跡?	縄文早・中・後・弥生・古墳・中世
17	下別当遺跡	散布地	縄文中～晩
18	観音堂山遺跡	散布地	縄文・平安
19	足の又遺跡	散布地	縄文晩
20	欠山遺跡	散布地	縄文
21	称宜ノ沢遺跡	散布地	縄文後
22	曲竹小屋館跡	城館	中世
23	淡島山遺跡	散布地	縄文後・古代
24	岩蔵寺遺跡	散布地	縄文晩・古代
25	妙見遺跡	散布地	縄文晩
26	下原遺跡	散布地	縄文中
27	上原遺跡	散布地	縄文後
28	清水遺跡	散布地	縄文・弥生
29	日向前遺跡	散布地	縄文早・晩・古代
30	八卦遺跡	散布地	縄文後
31	市ノ沢遺跡	散布地	弥生・古代
32	鍛冶沢遺跡	散布地	縄文早・中～晩・弥生・古代
33	白九頭龍古墳	古墳	古墳
34	矢附館跡	城館	中世
35	下永野B遺跡	散布地	奈良・平安
①	我妻家住宅	建造物・宅地	江戸中期、国重要文化財
②	曲竹一里塚附古碑群	一里塚・古碑群	近世、町指定文化財



写真2 曲竹一里塚附古碑群

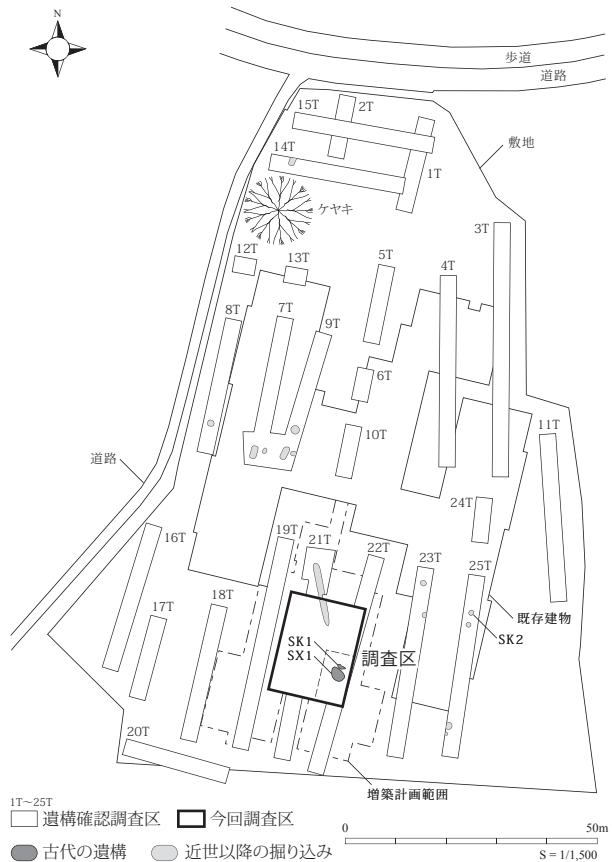


写真3 重要文化財我妻家住宅（主屋）

第2章 調査に至る経緯

小原遺跡は蔵王町大字曲竹字小原・田中地内に所在し、縄文時代の遺跡として宮城県遺跡台帳に登録された周知の埋蔵文化財包蔵地である。平成18年6月に社会福祉法人桃寿会より特別養護老人ホーム建設計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が蔵王町教育委員会経由で宮城県教育委員会へ提出され、宮城県教育委員会から計画地内における埋蔵文化財の状況を把握するための遺構確認調査を実施する必要があるとの回答があった。これを受けて社会福祉法人桃寿会と協議した結果、同年7月に蔵王町教育委員会が計画地10,000㎡を対象として遺構確認調査（第4図）を実施し、その結果をみて今後の対応について別途協議することとなった。遺構確認調査の結果、計画地内の遺構分布状況は散漫で、計画地南部で堆積土に焼土ブロックを含む竪穴住居状の遺構1基が確認されたのみであった。この結果を基に再度事業計画と遺跡に対する保護措置について協議を行なったところ、遺構が確認された部分については建設用地から除外し、整地工事による盛土厚を2m以下とした上で緑地として現状保存を図ることで合意した。

その後、平成23年3月に社会福祉法人桃寿会より特別養護老人ホーム増床計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が蔵王町教育委員会経由で宮城県教育委員会へ提出された。計画は既存建物の南側に建築面積832.96㎡、鉄筋コンクリート造平屋建ての建物を増築するもので、増築位置は平成18年の遺構確認調査で遺構が確認された部分とかかわりを持つものと判断された。事業の実施にあたっては、事前に発掘調査を実施する必要があるとの回答が宮城県教育委員会より示された。これを受けて社会福祉法人桃寿会と協議した結果、増床事業の実施は近年の高齢化に対応した適切なサービスを提供する上で不可欠であり、既存建物との関係から設計変更も難しいとの事から事前に発掘調査を実施して遺跡の記録保存を図ることで合意した。その後、調査の実施に関する条件整備が整った同年5月12日に社会福祉法人桃寿会と蔵王町との間に埋蔵文化財発掘調査業務委託に関する覚書の取り交わしならびに業務委託契約を締結し、同年5月16日より蔵王町教育委員会が発掘調査に着手した。



第4図 調査区配置図



写真4 調査区掘削作業

第3章 調査の方法と経過

遺構確認調査は平成18年7月18日～24日にかけて実施し、重機による表土除去の後、人力で遺構確認作業を実施した。用地内には鉄筋コンクリート造平屋建の建物1棟とアスファルト舗装による駐車場を整備する計画であるが、位置等の詳細は用地内の遺構の分布状況を踏まえて策定したいとの意向が事業主より示されていた。このため、宮城県教育委員会との協議を経て計画地の全域を調査対象として調査トレンチ25本(合計1,335㎡)を設定した(第4図)。この結果、計画地南部で堆積土に焼土ブロックを含む竪穴住居状の遺構1基が確認された。確認面の堆積土中には土師器・須恵器片が含まれており、古代の遺構と推定された。このほか、円形・長楕円形の土坑13基・溝跡1条が確認されたが、堆積土はしまりのない暗褐色土で、近世の陶磁器片を含むことから近世以降の掘り込みと判断された。

事前調査は平成23年5月16日に着手し、遺構が確認されていた地点を含む東西15m、南北20mの調査区を設定した。調査の方法は重機による表土・盛土除去(写真4)の後、人力で遺構確認作業を実施し、確認した遺構を精査した(写真5)。遺構は20分の1縮尺の平面図を作成し(写真6)、必要に応じて同縮尺の断面図を作成した。遺構の出土遺物は遺構番号と出土層位ごとに取り上げた。記録写真についてはデジタル一眼レフカメラを用いて適宜撮影した。5月21日までにすべての事前調査と埋め戻し作業を完了した。



写真5 発掘作業（遺構の精査）

整理作業は5月23日から着手した。遺構図については、手実測で作成した図面をイメージスキャナとビットマップ画像編集ソフトウェアを用いてデジタル画像化し、調査員が作成した遺構調書を参照しながらパソコン内でベクトル画像編集ソフトウェアを用いてデジタルトレースを行なった。遺物については、水洗洗浄の後に注記を行ない、可能な限り接合と修復を行なった上で遺物調書を作成し、遺物の性格と残存状況などに応じて実測図あるいは拓本を作成した(写真7)。遺物の実測図およびトレース図についてはすべて手作業により作成した。その後、デジタル一眼レフカメラを用いて遺物の写真撮影を行なった。



写真6 発掘作業（遺構の測量）

以上の経過を経て作成した遺構・遺物調書と図面等を基に執筆した本文と、遺構・遺物の写真・図面等のレイアウトおよび編集作業をDTPソフトウェアを用いて実施し、本書の印刷・製本を行なって本事業を完了した。



写真7 整理作業（遺物の実測）

第4章 調査の結果

第1節 基本層序

調査区は遺跡範囲の南東部にあたり、特別養護老人ホーム敷地内に位置する。敷地内は厚さ2m弱の盛土により平坦に造成されているが、造成前の現況は畑地で、南向きの緩斜面であった。当時の地表面の遺物の散布は散漫で、耕作に伴う耕起のほかは大きな地形の改変は行なわれていないことが遺構確認調査で確認されている。基本層序はI～V層に区分される。I層は敷地造成に伴う盛土で、層厚は200cm程度である。II層（黒褐色シルト）は造成前の旧表土および旧耕作土である。層厚は15cm程度である。III層（黒色シルト）は黒色火山灰層で層厚は10～20cmである。IV層（暗褐色シルト）は漸移層で層厚は15cm程度である。V層（黄褐色粘質シルト）は黄褐色ローム層である。遺構はすべてV層上面で確認した。

I層	砂礫混合土	敷地造成に伴う盛土	層厚 200cm 程度
II層	黒褐色シルト	造成前の旧表土・旧耕作土	層厚 15cm 程度
III層	黒色シルト	黒色火山灰層	層厚 10～20cm
IV層	暗褐色シルト	漸移層	層厚 15cm 程度
V層	黄褐色粘質シルト	黄褐色ローム層	



写真8 遺構確認作業



写真9 SX1 縦穴状遺構確認作業



写真10 遺構確認状況（南から）

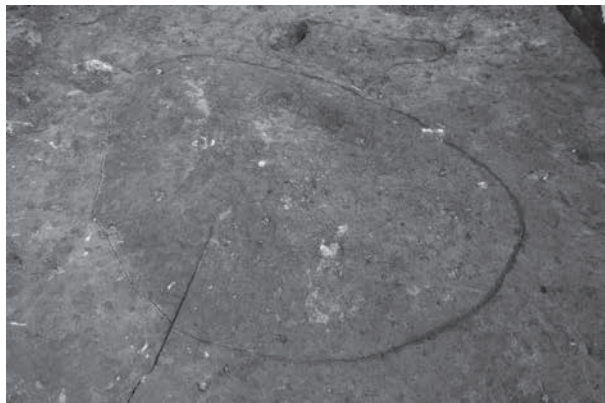


写真11 SX1 縦穴状遺構確認状況（南から）

第2節 発見された遺構と遺物

確認した遺構は、竪穴状遺構 1 基、土坑 1 基である。以下、遺構の状況と出土した遺物について述べる。

【SX1 竪穴状遺構】

平面形は長軸 335cm、短軸 242cm の楕円形で、深さ 20cm の皿状を呈する。北西側に焼面を形成し、東側と西側に各 1 基の柱穴を持つ。東側の P1 柱穴は平面形が長軸 62cm、短軸 56cm の隅丸方形を呈し、深さ 38cm、西側の P2 柱穴は平面形が長軸 60cm、短軸 38cm の不整楕円形を呈し、深さ 28cm である。P1 柱穴で柱材の抜き取り痕跡を確認した。

堆積土は 5 層に細分され、1 層は焼土粒・炭化物粒を含む黒褐色シルト、2 層は焼土ブロックを多量に含む黒褐色シルト、3 層は木炭片の集積層、4 層は被熱による赤色硬化層、5 層は焼土・炭化物粒を少量含む黒褐色シルトである。

焼面を形成していることと、柱穴が 5 層を掘り込んでいることから、4・5 層上面が本遺構の機能面と考えられる。焼面は北西側の長さ 160cm、幅 60cm の範囲に帯状に分布し、上面は平坦である。中央部には焼面に接して木炭片の集積（3 層）が、南東側は破砕された焼土ブロックの集積（2 層）が分布し、機能時の堆積層と考えられる。これらを覆う 1 層は廃絶後の自然堆積層である。

遺物は堆積土よりロクロ土師器坏（第 6 図 3）・甕（第 6 図 5）、土師器甕（第 6 図 6）・甕？（第 6 図 7）、須恵器坏（第 6 図 1・2）・甕？（第 6 図 4）が出土した。

ロクロ土師器坏（第 6 図 3）は体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部がそのまま外傾する。底部の切り離し方法は不明で、外面の体部にケズリ→ミガキ調整、底面にケズリ調整、内面にヘラミガキ→黒色処理を施す。ロクロ土師器甕（第 6 図 5）は胴部が内弯し口縁部がやや外反気味に外傾する。外面に格子状タタキ目→ナデ→ロクロナデ調整、内面の胴部にナデ、口縁部にロクロナデ調整を施す。土師器甕（第 6 図 6）は無底式の甕の破片で、外面の胴部下位に格子状タタキ目→ナデ調整、外面の胴部下位にナデ調整の後、胴部下端の開口部周縁にヘラケズリ調整を施す。胎土の色調と調整技法などの特徴から、第 6 図 5 と同一個体の可能性があり、その場合第 6 図 5・6 はロクロ土師器甕であると考えられる。第 6 図 7 は、無底式の甕の破片の可能性もある。内面と底面にヘラミガキ調整を施す。須恵器坏（第 6 図 1・2）は体部が内弯気味に立ち上がり、いずれも回転ヘラ切りによる底部の切り離し後に再調整を施す。再調整の方法は手持ちヘラケズリ調整によるもの（第 6 図 1）と、ナデ調整によるもの（第 6 図 2）がある。須恵器甕？（第 6 図 4）は頸部の破片で、内外面にロクロナデ調整を施す。

このほか小片のため図化しなかったが、確認面・堆積土より土師器甕の体部破片、ロクロ土師器甕の口縁部破片、P2 柱穴確認面よりロクロ土師器の底部破片などが出土した。土師器甕は内面にヘラナデ調整、外面に平行タタキ調整を施す。ロクロ土師器は内外面にロクロナデ調整、底部にナデ調整を施す。

【SK1 土坑】

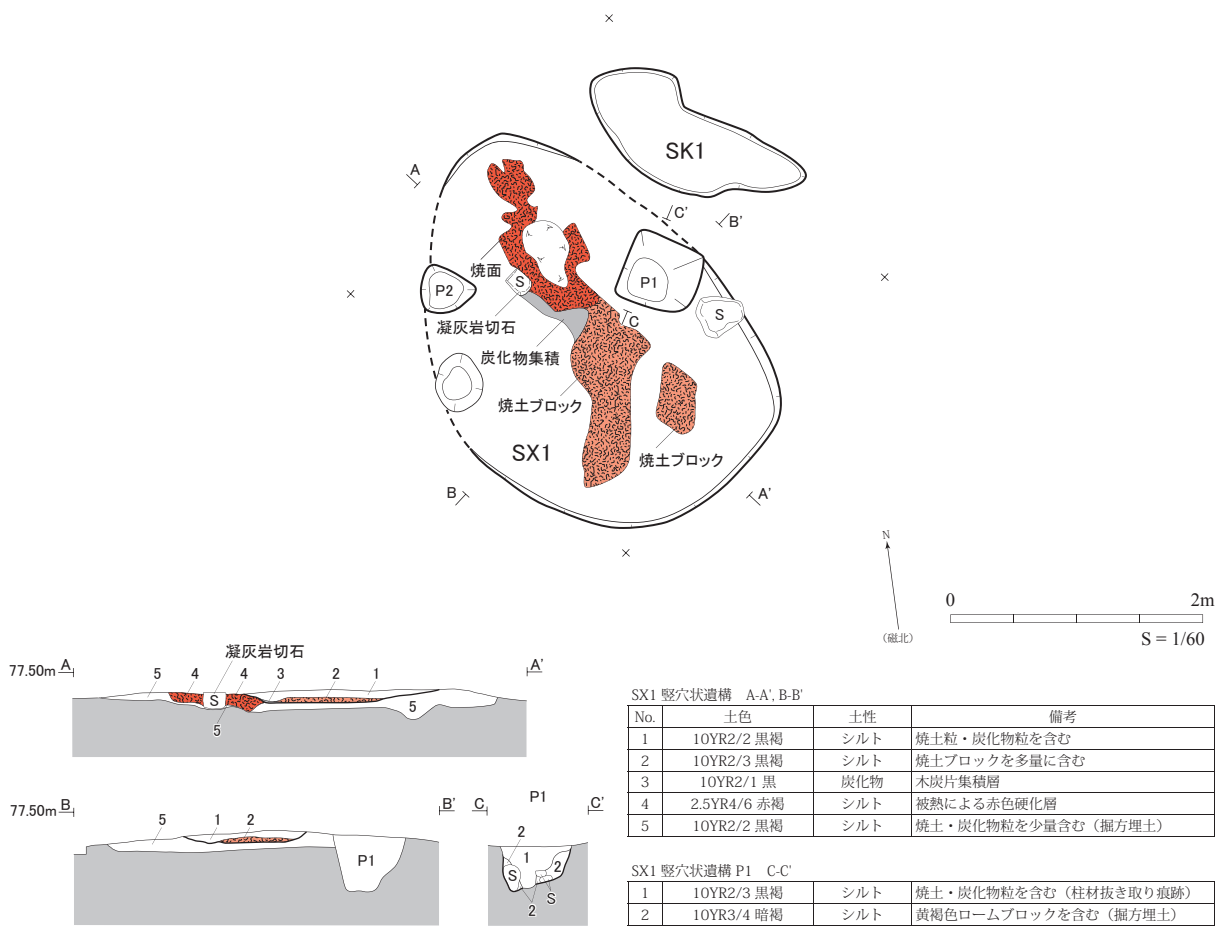
SX01 竪穴状遺構の北東側に隣接している。平面形は長軸 187cm、短軸 75cm の不整楕円形で、深さ 20cm の皿状を呈する。堆積土は黄褐色ロームを少量含む黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

遺物は出土していない。

【その他の出土遺物】

試掘調査 25T で確認した SK2 土坑堆積土より磁器鉢類（第 6 図 9）が、本調査区Ⅱ層より須恵器坏（第 6 図 8）が出土した。第 6 図 9 は染付磁器の底部破片で肥前産である。第 6 図 8 は外底面にヘラケズリ調整？を施し、ヘラ書き「×」がある。

このほか小片のため図化しなかったが、本調査区表土・遺構確認面より土師器甕の頸部・体部破片が出土した。内外面にナデ調整を施すもので、外面の調整がハケメ状のナデ調整となるものがある。



第5図 SX1 竪穴状遺構・SK1 土坑



写真12 SX1 竪穴状遺構・SK1 土坑 (南から)



写真 13 SX1 竪穴状遺構断面（南から）

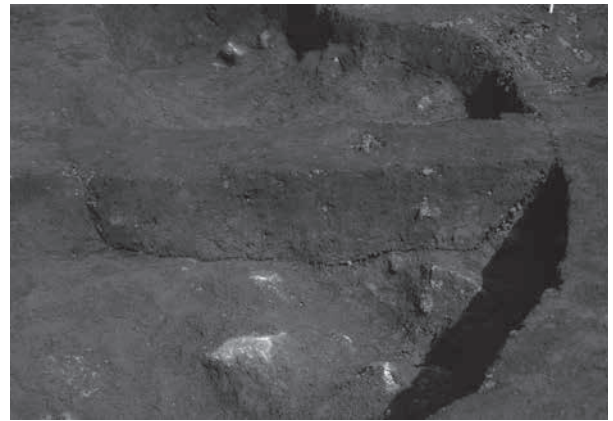


写真 14 SK1 土坑断面（西から）



写真 15 P1 柱穴断面（東から）



写真 16 P2 柱穴断面（西から）

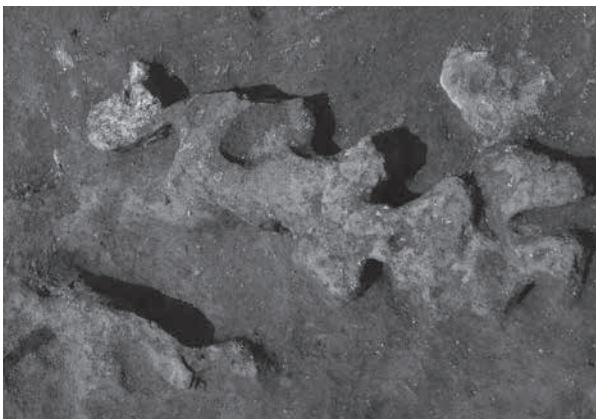


写真 17 SX1 竪穴状遺構焼面検出状況（北から）

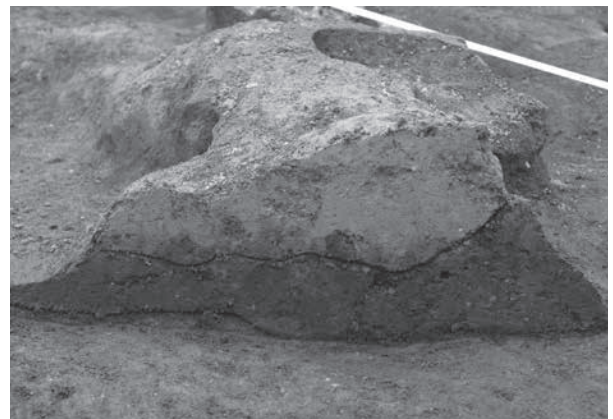


写真 18 SX1 竪穴状遺構焼面断面（北から）

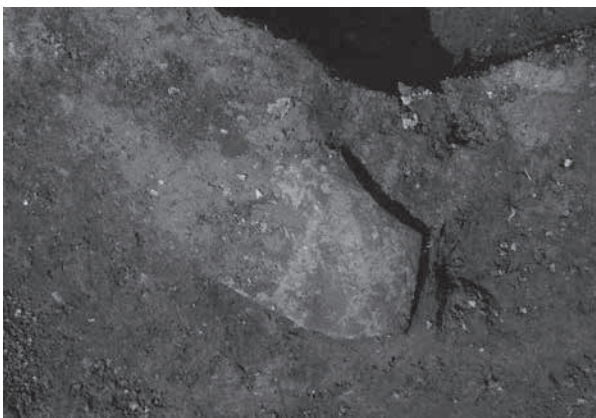


写真 19 SX1 竪穴状遺構遺物出土状況（北から）

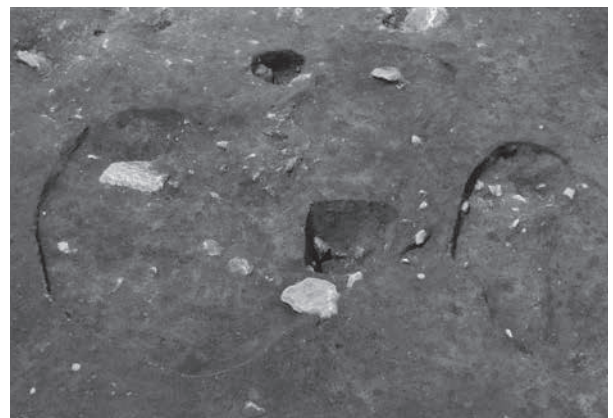
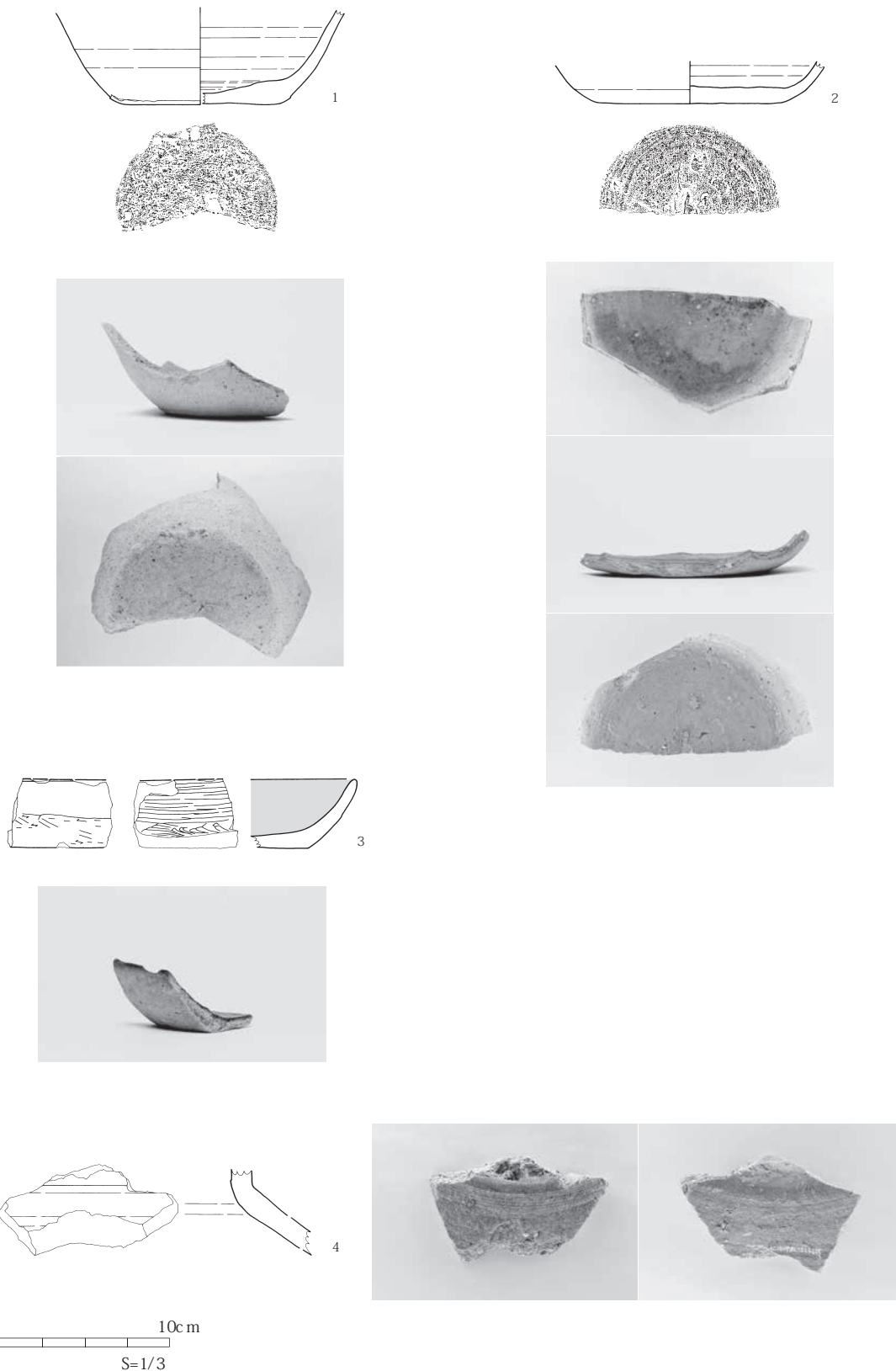
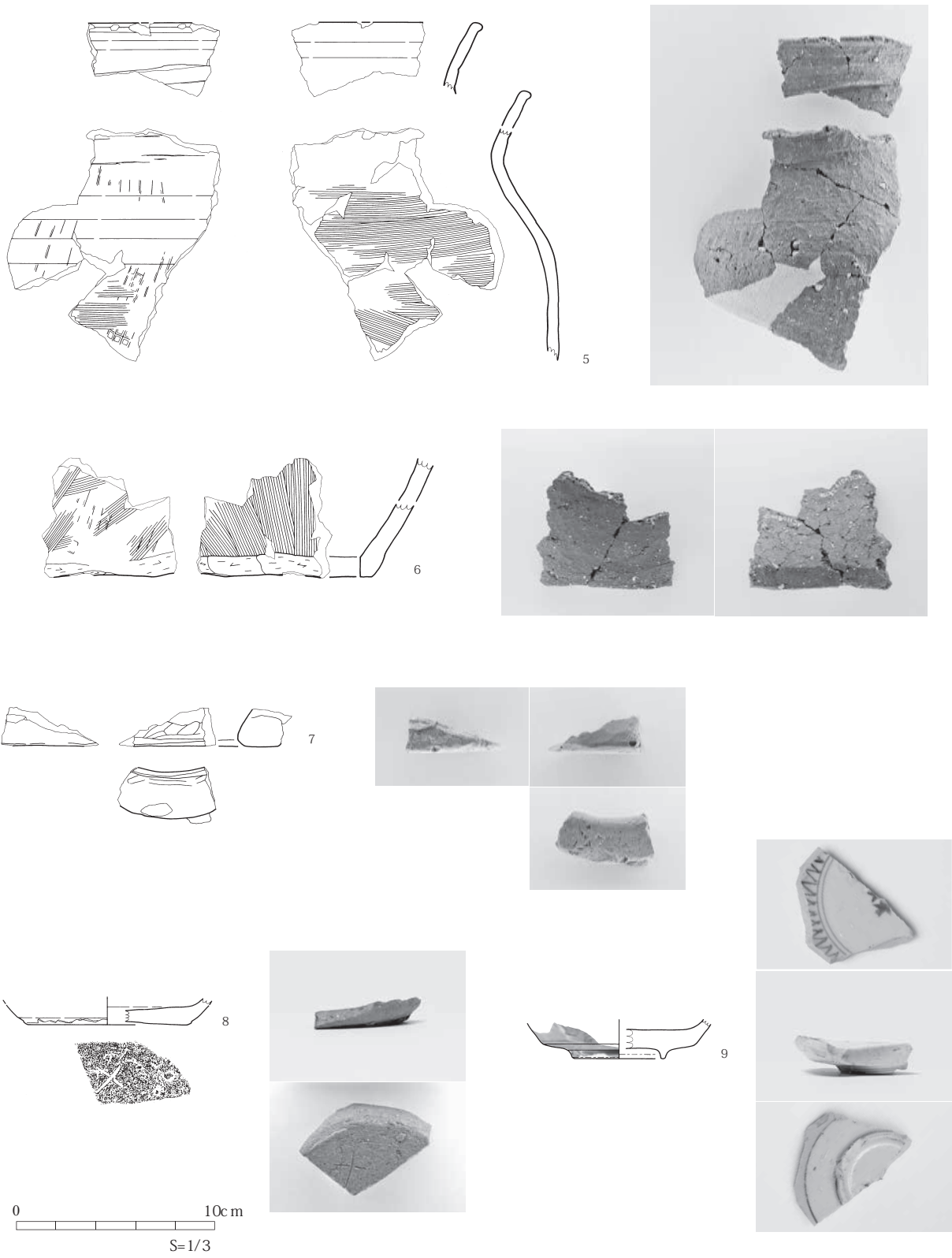


写真 20 SX1 竪穴状遺構・SK1 土坑完掘状況（東から）



No.	調査区	遺構名	層位	種類	器種	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録
							口径	底径	器高		
1	本調査区	SX1	堆積土	須恵器	坏	内面：ロクロナデ，外面：(体)ロクロナデ，(底)回転ヘラ切り→手持ちヘラケズリ	-	(7.40)	(4.40)	体部 ~ 底部	1
2	本調査区	SX1	堆積土 2層	須恵器	坏	内面：ロクロナデ，外面：(体)ロクロナデ，(底)回転ヘラ切り→ナデ，内面に黒色付着物	-	(8.70)	(2.00)	体下部 ~ 底部	2
3	本調査区	SX1 P1	堆積土	ロクロ土師器	坏	内面：ヘラミガキ→黒色処理，外面：(体)ケズリ→ミガキ，(底)ケズリ	-	-	(3.15)	1/8	7
4	試掘 22T	SX1	確認面	須恵器	甕?	内面：ロクロナデ，外面：ロクロナデ	-	-	(4.00)	頸部	3

第6図(1) SX1 竪穴状遺構出土遺物



No.	調査区	遺構名	層位	種類	器種	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録
							口径	底径	器高		
5	本調査区	SX1	堆積土2層	ロクロ土師器	甕	内面：(口) ロクロナデ, (胴) ナデ, 外面：格子状タタキ目→ナデ→ロクロナデ, 登録No.4と同一個体? (ロクロ土師器甕か)	-	-	-	口縁部 ~胴部	4
6	本調査区	SX1	堆積土	土師器	甕	内面：ナデ→ヘラケズリ, 外面：格子状タタキ目→ナデ→ケズリ, 端部：ヘラケズリ, 登録No.5と同一個体? (ロクロ土師器甕か)	-	-	(3.90)	底部	5
7	本調査区	SX1	堆積土	土師器	甕?	内面：ヘラミガキ, 底面：ヘラミガキ	-	-	(1.90)	下端部	6
8	本調査区	-	表土	須恵器	坏	内面：ロクロナデ, 外面：(体) ロクロナデ, (底) 切り離し不明→ヘラケズリ?→ヘラ書き「×」	-	(8.00)	(1.30)	体下部 ~底部	9
9	試掘 25T	SK2	堆積土	磁器	鉢類 (腰折形)	肥前産 (18世紀), 透明釉・染付, 内面：(体) 網目状文?, 二重圏線, (見込) 紅葉 [コンニャク印判?], 外面：(体) 圏線, (高台) 二重圏線, (高台内) 紋様不明	-	(4.70)	(1.90)	体下部 ~底部	8

第6図(2) SX1 竪穴状遺構・SK2 土坑・遺構外出土遺物

第5章 考察

第1節 遺物の特徴と編年的位置づけ

遺物が出土した遺構はSX1 竪穴状遺構とSK2 土坑がある。SK2 土坑では近世磁器（肥前産、18世紀）1点が出土したのみである。ここでは、SX1 竪穴状遺構出土土器の年代について検討する。

遺物はロクロ土師器坏（第6図3）・甕（第6図5）・甑（第6図6）・甑？（第6図7）、須恵器坏（第6図1・2）・甕？（第6図4）がある。ロクロ土師器坏（第6図3）は底部の切り離し方法が不明で、外面の体部にケズリ→ミガキ調整、底面にケズリ調整、内面にヘラミガキ→黒色処理を施す。ロクロ土師器甕（第6図5）は外面に格子状タタキ目→ナデ→ロクロナデ調整、内面の胴部にナデ、口縁部にロクロナデ調整を施す。土師器甑（第6図6）は無底式の甑の破片で、外面の胴部下位に格子状タタキ目→ナデ調整、外面の胴部下位にナデ調整の後、胴部下端の開口部周縁にヘラケズリ調整を施す。胎土の色調と調整技法などの特徴から、第6図5と同一個体の可能性がある。須恵器坏（第6図1・2）はいずれも回転ヘラ切りによる底部の切り離し後に再調整を施す。再調整の方法は手持ちヘラケズリ調整によるもの（第6図1）と、ナデ調整によるもの（第6図2）がある。

このうち、ロクロ土師器は表杉ノ入式（氏家 1957・1967）の範疇に含まれる。表杉ノ入式の年代的な位置づけは8世紀末～12世紀頃と幅広いが、主に坏類に加えられる調整技術について見ると、底部の切り離し後に再調整を施すものから回転糸切りの後無調整のものへ変遷する（阿部 1968・桑原 1969）。また、利府町郷楽遺跡出土土器の分析から①ロクロ使用の製品は8世紀末頃から漸移的に組成比率を増し、9世紀前半にはすべてロクロ使用となること、②9世紀後半になると口径に比して底径が小さく、底部の切り離し後に再調整を施さなくなることが明らかにされている（菊地ほか 1990）。

上記のことを踏まえてSX1 竪穴状遺構出土遺物をみると、土師器坏は手持ちヘラケズリによる再調整が施されており、9世紀後半まで降ることはないものと考えられる。また、土師器甕類にはロクロ調整に先立って叩き技法を用いることが特徴的である。このような特徴を持つ土器群は、色麻町上新田遺跡1・5・8号竪穴住居跡出土土器（宮城県教育委員会 1981）、山王遺跡町地区SK2763土壙出土土器（宮城県教育委員会 1998）、市川橋遺跡SD1351C河川跡出土土器（多賀城市教育委員会 2003）に類例がみられ、年代は8世紀末～9世紀初頭頃に位置づけられている。

また、須恵器坏は底部が平底で体部が内湾気味に立ち上がり、底部は回転ヘラ切りの後にナデ調整を施すもの（第6図2）があり、利府町大貝窯跡1・16号窯跡出土土器（利府町教育委員会 2004）に類例がみられる。大貝窯跡1・16号窯跡出土土器の年代は8世紀末～9世紀初頭頃に位置づけられている。

以上のことから、SX1 竪穴状遺構出土土器の年代は8世紀末～9世紀初頭頃と考えられる。

第2節 遺構の特徴と性格

確認した遺構はSX1 竪穴状遺構とSK1 土坑がある。SX1 竪穴状遺構の機能時期は、出土遺物の特徴から8世紀末～9世紀初頭頃と考えられる。SK1 土坑については遺物が出土していないため機能時期を推定することができない。ここでは、SX1 竪穴状遺構の性格を検討する。

SX1 竪穴状遺構は長軸335cm、短軸242cmの楕円形で、深さ20cmの皿状を呈する。上部が耕作等による攪乱を受けており、残存状況はあまり良好でない。東西に各1基の柱穴を持つことから、簡易な

上屋構造を有する施設であったと考えられる。床面には柱穴に挟まれる位置より北西側の長さ 160cm、幅 60cm の範囲に焼面が帯状に分布する。焼面の上面は平坦で、赤色硬化層は厚さ 10cm に及び、強く被熱している。中央部には焼面に接して木炭片の集積があり、さらに南東側には破碎された焼土ブロックの集積が分布する。こうした状況から、焼面のある北西側で何らかの焼成作業が行なわれた後、南東側へ灰などの掻き出しが行なわれたと推定される。また、さらに南東側に廃棄されている焼土ブロックは、焼面の周囲あるいは上部を構築していた可能性が考えられる。

遺物は堆積土中より須恵器・土師器・ロクロ土師器が出土しているが、施設内での焼成を窺わせるものではなく、焼面の性格については不明である。確認した遺構の特徴からは、管見の限り類例を見いだせなかった。遺構の残存状況が良好でないことも踏まえれば、煙道のような施設の有無は確認できなかったものの、大型のカマドを付設する竪穴住居状の施設であった可能性が考えられる。

第6章 まとめ

1. 小原遺跡は、宮城県南部の刈田郡蔵王町大字曲竹字小原・田中地内に所在する。遺跡は蔵王町東部の松川右岸に形成された矢附段丘上に立地している。
2. 今回の発掘調査は特別養護老人ホーム増床事業計画を原因とする事前調査として実施した。調査区は遺跡範囲の南東部に位置し、発掘調査面積は 300㎡である。
3. 確認した遺構は、古代の竪穴状遺構 1 基、土坑 1 基である。竪穴状遺構は焼面と炭化物集積、焼土ブロック集積を伴う。このほか、遺構確認調査で近世以降の土坑 13 基、溝跡 1 条を確認した。
4. 出土した遺物は、須恵器、土師器、ロクロ土師器、近世磁器である。ロクロ土師器は平安時代初頭の 8 世紀末～9 世紀初頭頃に位置づけられる。
5. 今回の発掘調査成果は、松川流域に居住した当時の人びとの暮らしぶりを知る上で貴重な手掛かりとなるものである。

引用・参考文献（編著者名五十音順）

- 阿部義平 1968 「東国の土師器と須恵器－多賀城外出土土器をめぐって－」 帝塚山考古学 1
- 氏家和典 1957 「東北土師器の型式分類とその編年」 歴史 14
- 氏家和典 1967 「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって－奈良・平安土師器の諸問題－」 『山形県の考古と歴史』
- 片倉信光 1932 「磐城国曲竹発見の土偶について」 『上代文化』 第 8 号
- 片倉信光 1933 「下別当出土の雙口人面土器」 『上代文化』 第 9 号
- 刈田郡教育会 1928 『刈田郡誌』
- 菊地逸夫・吉田雅之・庄子敦 1990 「古代の遺構と出土遺物」 『利府町郷楽遺跡Ⅱ』 宮城県文化財調査報告書 134・利府町文化財調査報告書 5 宮城県教育委員会・利府町教育委員会
- 桑原滋郎 1969 「ロクロ土師器坏について」 歴史 39
- 蔵王町教育委員会 2009 『青竹遺跡』 蔵王町文化財調査報告書第 9 集
- 佐藤伝蔵 1904 「日本石器時代地名表」 『人類学雑誌』 第 5 版 223 号
- 多賀城市教育委員会 2003 『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ－』 多賀城市文化財調査報告書第 70 集
- 林謙作 1965 「縄文時代・東北」 『日本の考古学Ⅱ』
- 宮城県教育委員会 1981 「上新田遺跡」 『長者原貝塚・上新田遺跡』 宮城県文化財調査報告書第 78 集
- 宮城県教育委員会 1998 『山王遺跡町地区の調査－県道泉塩釜線関連調査報告書Ⅱ－』 宮城県文化財調査報告書第 175 集
- 宮城県教育委員会 2010 「鍛冶沢遺跡」 『鍛冶沢遺跡ほか』 宮城県文化財調査報告書第 222 集
- 利府町教育委員会 2004 『大貝窯跡群』 利府町文化財調査報告書第 12 集

報 告 書 抄 録

ふりがな	おぼらいせき							
書名	小原遺跡							
副書名	特別養護老人ホーム増床事業に伴う緊急発掘調査							
巻・次								
シリーズ名	蔵王町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 12 集							
編著者名	鈴木 雅							
編集機関	蔵王町教育委員会							
所在地	〒 989-0892 宮城県刈田郡蔵王町大字円田字西浦北 10 TEL 0224-33-3008 Fax0224-33-3831							
発行年月日	西暦 2011 年 (平成 23 年) 9 月 30 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
おぼらいせき 小原遺跡	宮城県刈田 郡蔵王町大 字曲竹字小 原・田中地 内	43010	05126	38° 4' 41"	140° 39' 14"	2011.5.16) 2011.5.21	300㎡	特別養護老 人ホーム増 床事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
小原遺跡	集落跡 散布地	平安	竪穴状遺構 1 基 土坑 1 基		土師器 ロクロ土師器 須恵器			
		近世以降	土坑 13 基 溝跡 1 条 (遺構確認調査による)		磁器			
					総量：コンテナ 1 箱分			
要約	平安時代の竪穴状遺構 1 基を確認した。焼面と炭化物集積、焼土ブロック集積を伴う。							

蔵王町文化財調査報告書 第12集

小原遺跡

—特別養護老人ホーム増床事業に伴う緊急発掘調査—

2011年（平成23年）9月30日 印刷・発行

発行 蔵王町教育委員会

〒989-0892 宮城県刈田郡蔵王町円田字西浦北10

T E L 0224-33-3008 F A X 0224-33-3831

印刷 株式会社オ一エム

〒537-0025 大阪市東成区中道4-5-14-101

T E L 06-6974-1917 F A X 06-6975-0809
